海と空―樫野の人々―（4―⑽　2～3年）

一　ねらい

世界の中の日本人としての自覚をもち、国際的視野に立って同じ人間として尊重し合おうとする道徳的心情を育む。

二　資料の特質

⑴　資料の生かし方

国際理解の理想の実現のために基本となることは、どこの国の人々も同じ人間として尊重し合い、差別や偏見をもたずに公正、公平に接することである。本資料はトルコ航空機に救出された主人公が、エルトゥールル号遭難の際に樫野の人々が示した献身的行為を知ることによって、国際的規模の相互扶助を実感する。樫野の人々の思いとトルコ航空機の邦人救出に通底する精神の象徴的光景としての「海と空」が一つになった水平線に焦点をあてたい。

⑵　資料の概要

イラン・イラク戦争のさなかの昭和六十年、テヘランに取り残された邦人が二機のトルコ航空機に救出された。その中の一人であった私はなぜトルコなのか疑問を抱いたまま二十年が経っていた。トルコ人が親日的である理由の一つが、明治二十三（一八九〇）年、紀伊大島の樫野崎で座礁したエルトゥールル号の遭難事故にあることを知る。トルコ記念館を訪れ、樫野の人々が六十九名のトルコ人の救助・帰国を献身的に支えた事実が分かる。トルコ航空機による邦人救出に重ねて考えることで、ただただ危機に瀕した人々を助けたいとの共通の思いを、はっきりと意識したのであった。

三　展開例

○　私は、なぜトルコ記念館を訪れたのだろう。

・トルコ航空機に救出されたが、どうしてトルコが飛行機を出してくれたのかを確かめるため。

・トルコが親日的である理由を確かめるため。

○「わしらもトルコの方も一緒じゃ。」と飼っていたニワトリを差し出した樫野の人々には、どんな思いがあったのだろう。

・困っている時に助けるのは当たり前。

・人の命に国の違いはない。

・同じ人間だ。

◎　海と空が水平線で一つになるのを見つめながら、私はどんなことを思っているだろう。

・私の命は、樫野の人々によって今ここにあるのだなあ。

・二つの救出は、何の見返りも期待せずに危険に陥った人々を助けようとする人間愛そのものだ。

・同じ人間として互いに尊重し合う心が世界平和に大切なことだ。

■「心のノート」の「世界の平和と人類の幸福を考える」（百二十八～百二十九頁）が活用できる。

四　指導上の留意点及び工夫

・資料への興味を高めるため、「樫野崎灯台」「船甲羅」「エルトゥールル号」「慰霊碑」「トルコ記念館」「沖周村長の日記」等の写真を提示して、臨場感に溢れた実話の世界に浸れるように工夫することも有効である。

【写真提供】和歌山県串本町教育委員会